

やまなし介護感動ストーリー大賞  
受賞者作品集

令和6年2月

山梨県



やまなし

本年度創設しました「やまなし介護感動ストーリー大賞」は、介護に関する感動エピソードを募集し、選出されたエピソードの応募者及びエピソードに登場する介護サービスを提供した個人・事業所を表彰するとともに、受賞エピソードを漫画化、冊子を作成し、関係各所へ配布することで、介護の魅力発信や若年層などに介護のすそ野を拡大することを目的としています。

このたび、介護サービス利用者やそのご家族、介護職員の方から多数のエピソードを応募いただき、改めて感謝申し上げます。

審査を行った結果、次のとおり、グランプリ 1 点、準グランプリ 2 点を選出させていただきました。

選出された作品については、本年度中に漫画化し、介護の魅力発信等に活用して参ります。

(受賞者一覧)

表彰種類	作者／個人／事業所	氏名・事業所名
グランプリ	作者	菅尾尚子 様
	作品に登場する個人	デイサービスセンター甲斐の郷 山口千里 様
	作品に登場する事業所	デイサービスセンター甲斐の郷 様
準グランプリ	作者	若林大貴 様
	作品に登場する事業所	医療法人静正会 三井クリニックデイサービスセンター福福 様
準グランプリ	作者	中村昌史 様
	作品に登場する事業所	グループホーム ラシーク桂台 様

「母のヘアスタイル」 菅尾尚子 様

大病後の母の介護に疲れ、ヨレヨレになっていた昨夏。母の髪が伸びても、美容院を手配する余裕などない。そんなある日、ざんばら髪のままデイサービスに送り出すと、夕方帰ってきた母が華麗に変化していた。髪がきれいにブローされ、両サイドを三つ編みにして後ろで留めてあったのだ。出がけとは雲泥の小ざれいさ。老女の三つ編みはかわいらしく、介護士さんの遊び心も感じられた。母のことを単に面倒みるべき年よりではなく、おしゃれをしてもよい個人の女性として見てくれている。母になじみ親近感をもってくれればこそそのひと手間だろう。——そういえば、昔、編み込みが流行ったな。翌朝は介護士さんに倣い、母の髪の両サイドを編み込みにして送り出した。私なりの「ありがとう」だ。後日、当の介護士さんが迎えに来て、「(編み込みが)お上手ですね」と私のことを褒めてもくださった。久しぶりに、人と明るいやり取りをした気分になった。

ようやく訪問美容で母の髪を切り、あれよあれよという間に 3 ヶ月。また母の髪が伸びたので、こんどはビジューのついたヘアクリップで両サイドを留めて送り出した。夕方、デイサービスから帰ってきた母の髪は、きっちりハーフアップになっていた。

これは、母のヘアスタイルを通したささやかなコミュニケーション。けれど、そんな小さなやり取りに、心を込めて母を支えてくれる人を感じ、私自身もまた癒やされている。

「お兄ちゃん、ボタンつけて」 若林大貴 様

私は介護の仕事に就きまだ10ヶ月の新人です。以前は営業のサラリーマンとして10年間働いていました。大好きだった祖父の死を大きなきっかけに、介護の世界でご本人やご家族の支えになりたいと思い転職しました。経験が全く無い中でのスタートのため、先輩スタッフの方々と介護知識や介助技術に大きな差を感じます。心折れそうになる毎日。

その中でも大きな喜びを感じる出来ごとがありました。1人のおばあちゃんのお洋服のボタンが取れてしまい「お兄ちゃん、ボタンつけて」とお願いを受けました。不器用なうえ、裁縫は得意ではありませんが、ボタンの1つくらいならと思い引き受けました。一生懸命ボタンを止め直したお洋服をお返しすると「ありがとうございます」と、満面の笑顔で受け取ってくれました。私は小さな達成感に浸っていると、その方が今度は涙を流していたのです。慌ててどうされたのかお尋ねすると「息子に優しくしてもらったような気持ちが出て、嬉しくて嬉しくて涙が出ただよ」と話してくれました。その方には離れて住む息子様がいらっしゃいます。男性の私がお手伝いしたことで、大好きな息子様の姿と重なり、嬉しさが涙として込みあげてきたとの事でした。ボタンを直すことは些細なことです。しかしその些細な優しさ1つで時に涙を流すほど喜び、感謝の気持ちを直接伝えて頂ける。介護の仕事の楽しさや喜び、心の温かさを感じました。介護の仕事に就き、本当によかったです。

「最後の野球観戦」 中村昌史 様

認知症グループホームに入居した当時94歳の男性利用者Mさんは巨人が勝つとご機嫌、負けると不機嫌になるほどの熱狂的な巨人ファンでした。

Mさんの娘さん家族も大の巨人ファンで、おじいちゃんを東京ドームに連れていきたいとの思いがありました。それを知った介護士Nは、家族と一緒に東京ドーム観戦を提案したところ、家族は快諾、すぐにチケットや特急券の手配をしてくれました。当時要介護2で心不全を患いながらも杖で歩行していたMさんの主治医に相談し許可をもらい、当日を迎えることになりました。

ご家族とは東京ドームで待ち合わせることになり、介護士Nは、最寄りの駅から電車でMさんと一緒に東京ドームを目指しました。

Mさんは巨人の中でも特に阿部選手のファンで、観戦中は家族が用意していた阿部選手のユニフォーム、リストバンド、マフラータオル着用で応援していました。その阿部選手がホームランを打った時、Mさんが大喜びでタオルを回していたそうです。介護士Nはその時、介護の仕事をしていてよかったと感じたそうです。

観戦から数日後、面会に来た娘さんから「おじいちゃんは、これでいつ死んでもいいです。本当にありがとうございました。」と仰っていただいたことは今でも鮮明に憶えています。